

吉田兼好著、三木紀人訳「徒然草(二)」講談社学術文庫 429、講談社 1982 年 4 月 20 日刊を読む

第百八段 寸陰惜しむ人なし

1. (1)寸陰惜しむ人なし。これ、よく知れるか、愚かなるか。
 (2)愚かにして怠る人のために言はば、一錢軽しといへども、これを重ぬれば、貧しき人を富める人となす。
 (3)されば、商人の一錢を惜しむ心、切なり。
 (4)刹那覚えずといへども、これを運びて止まざれば、命を終ふる期、忽ちに至る。
2. (1)されば、道人は、遠く日月を惜しむべからず。
 (2)ただ今の一念、むなしく過ぐる事を惜しむべし。
 (3)もし人來りて、我が命、明日は必ず失はるべしと告げ知らせたらんに、今日の暮るる間、何事をか頼み、何事をか営まん。
 (4)我等が生ける今日の日、何ぞその時節に異ならん。
 (5)一日のうちに、飲食・便利・睡眠・言語・行歩、やむ事を得ずして、多くの時を失ふ。
 (6)そのあまりのいとま幾ばくならぬうちに無益の事をなし、無益の事を言ひ、無益の事を思惟して時を移すのみならず、日を消し、月を互りて、一生を送る、もつとも愚かなり。
3. (1)謝靈運は法華の筆受なりしかども、心、常に風雲の思ひを觀ぜしかば、惠遠、白蓮の交はりを許さざりき。
 (2)しばらくもこれなき時は、死人に同じ。
 (3)光陰何のためにか惜しむとならば、内に思慮なく、外に世事なくして、止まん人は止み、修せん人は修せよとなり。

〈現代語訳〉

1. (1)わずかな時間を惜しむ人はいない。
 (2)それは、よく悟っているゆえか、それとも、惜しむことを知らぬ愚かさゆえか。
 (3)愚かなために怠る人に一言するなら、一錢はささやかなものだが、それを積み重ねれば、貧しき人を富める人にするのだ。
 (4)だから、商人は一錢を切実に惜しむのである。
 (5)刹那は知覚できない短い時間だが、これが継続していけば、死の時期がたちまちにやってくる。
2. (1)したがって、仏道を志す人は、ばく然と歳月を惜しんではない。
 (2)現在のこの一瞬がむなしく過ぎるのを惜しむべきである。
 (3)もし、人が来て、わが命が明日かならず失われることを告知されたなら、今日が暮れるまで、何を期待して、何事をするだろうか。われわれが生きる今日という日は、その日と本質的に違いはないのである。一日のうちに、飲食・用便・睡眠・言語・歩行などといったことで、やむなく多

くの時間を使ってしまう。

(4) その余暇がいくらもないのに、無益のことをし、無益のことを言い、無益のことを思って時を過ごし、月日を送り、一生を送るなどというのは、もっとも愚かなことである。

3. (1) 謝靈運^{しゃれいうん}は『法華經^{ほけきょう}』の翻訳文を筆録したほどの人だったが、野望があつたので、惠遠^{えおん}は白蓮社^{びやくれん}の仲間に入れなかった。

(2) かりそめにも、時間を惜しむ心がなければ、生きる意味を喪^{うしな}った者というべく、それは死者同然である。

(3) 時間を何のために惜しむかという、心中には雑念をまじえず、周囲には雑事のないようにつとめ、悪をやめようとする人はやめ、善を行なおうとする人は行なえ、というためである。

[コメント]

兼好法師の「徒然草」の一章。「徒然草」など日本人にとって宝物のような古典を学校で学んだら、口語訳を参照しながらでも OK なので、必ず、ゆっくりと全文を 1 ～ 2 度読み通すこと。読みながら時空を超えた著者との対話をするをお勧めしたい。

— 2014 年 1 月 3 日 林 明夫記 —